

信頼できる情報源の重要性について認識できる能力の 育成を志向した自由進度学習の実践と評価

Practice and Evaluation of Open-Ended Learning Aimed at Developing the Skill
to Recognize the Importance of Reliable Information Sources

白土瑞樹*・小林祐紀*²・北濱康裕*³・西岡遼*⁴・岩崎啓子*⁵・中川一史*⁶
笠間市立笠間中学校* 茨城大学*² 加賀市立片山津中学校*³ ひたちなか市立佐野中学校*⁴
茨城県立石岡第二高等学校*⁵ 放送大学*⁶

本研究の目的は、中学校国語科において、生徒が信頼できる情報源の重要性について認識できることを意図した自由進度学習の実践を提案及び実施し、成果と課題を明らかにすることである。中学校第3学年国語科「編集して伝えよう『環境』の新聞」の単元において、クラウドサービス（Googleサイト）を用いた自由進度学習を取り入れた授業を展開した。その結果、授業のねらいに関連して、生徒が制作及び記述した新聞、意見文はそれぞれA+B評価が88.5%、82.7%であった。主観評価による質問紙調査では、生徒は学習内容を理解し、授業に取り組んでいたこと、生徒はクラウドサービス（Googleサイト）を用いた自由進度学習を好意的に捉えていたことが明らかになった。

キーワード：自由進度学習、中学校、国語科、メディア・リテラシー

1. はじめに

GIGAスクール構想によって、1人1台端末及び大容量の通信ネットワークが整備され学習環境の改善が図られ、活用の進展が一定程度見られるものの、学習者の端末活用に関するリテラシーの課題が指摘されている（坂本ほか 2020、堀田・津田 2022等）。

リテラシーに関連して、中橋ほか（2021）は、メディア・リテラシーという文脈において国語科における授業開発の系譜をまとめており、2000年代前後から始まり、映像や写真等のメディアを活用した多くの授業が実践されてきたことを報告している。また関連する先行研究を概観すると、説明的文章を活用しての情報を批判的に理解できる能力の育成（光野 2002）やテレビコマーシャルを用いた情報を正しく読み解き、必要な情報を選択し、メディアをよりよく使いこなす能力の研究（佐藤・左近 2000）等を確認することができる。

近年では1人1台端末の活用により、学校教育において情報の発信者及び受信者になる学習場面が多く設定されることから、例えば手塚ほか（2022）はメディアが伝える情報の信憑性を意識させるための小学校4年生向けの学習プログラムを開発・実施している。他にも佐藤ほか（2022）は中学校社会科歴史

的分野において、学習者がWeb情報を批判的・分析的に読み取り、信憑性を評価する活動を設定し、関連する能力の向上を図っている。

そこで本研究では、国語におけるメディア・リテラシーに関する教育実践の流れを意識し、特設の授業を設定するのではなく、教科書に設定された題材を用いた授業を提案する。加えて授業展開においては、個別最適な学びの重要性が指摘されている（文部科学省 2021）ことを踏まえ、自由進度学習（奈須 2022）を採用する。自由進度学習とは、授業の進度を学習者自身が自由に決められる自己調整学習の手法の一つである。学習者が自らの進度を調整することで粘り強く学習に取り組むことができ、かつ一人一人に合った学習進度で学ぶことが可能と考えられている。

学習者の端末活用に関するリテラシーの程度やメディアとの接触時間は学習者それぞれによって異なる現状を鑑みると、授業方法として「自由進度学習」を採用することは有用であると考えられる。

改めて、本研究では今後も1人1台端末の活用により、学習者が情報の発信者及び受信者になる学習場面が多く設定されることから、信頼できる情報源の見極め方について扱う。加えて、主たる教材である教科書の題材を用いて国語科で実践し、自ら学びを進める自由進度学習を採用することで、今後の教育

実践への新たな示唆を得られると考えた。

2. 目的

本研究の目的は、中学校国語科において、生徒が信頼できる情報源の重要性について認識できることを意図した自由進度学習の実践を提案及び実践し、成果と課題を明らかにすることである。

3. 方法

3.1. 対象と授業実践の期間

本研究では、公立中学校第3学年2クラス（52名）を対象として第一筆者が授業を実施する。授業は2022年6月23日～7月12日に5時間かけて実施された。

3.2. 学習単元の概要

授業は、中学校第3学年国語科「編集して伝えよう『環境』の新聞」の単元である。本単元の最終的な活動の目標は環境に関連する「新聞」を作成することである。情報の送り手を経験することで、情報の信憑性の確認や情報の信頼性の担保の仕方等を考えながら、相手や目的を意識し、表現技法を駆使した情報発信ができると考え本題材を選定した。

本実践では中橋（2021）の「メディアを批判的に捉える能力」を参考に「信頼できる情報源の重要性について認識できる」ことを意図した授業を展開する（表1）。

表1 本研究における単元の指導計画

時間	生徒用学習課題
1時	<ul style="list-style-type: none"> 教科書「いつものように新聞が届いた～メディアと東日本大震災」を読む。 上記内容をまとめた動画を視聴する。 NHK for Schoolの動画を視聴し、新聞づくりに込められた思いを理解する。 「新聞」に求められる役割について考え、意見文を書く。
2時	<ul style="list-style-type: none"> 新聞作成のために、SDGsと環境に関連するテーマを設定する。 NHK for Schoolの動画を視聴し、メディア・リテラシーに対する理解を深める。 NHK for Schoolの動画を視聴し、新聞づくりの基礎的・基本的な知識を学ぶ。 書籍やインターネットを活用して情報収集を図る。
3時	<ul style="list-style-type: none"> 友達から自分の作成した新聞についてアドバイスをもらう。 一旦新聞を完成させ提出し、教師からフィードバックをもらう。
4時	<ul style="list-style-type: none"> 教師からのフィードバックをもとに、自分の新聞を改善する。 レイアウトや内容、出典の明記等に注意しながら、新聞を完成させる。
5時	<ul style="list-style-type: none"> 完成した新聞を相互評価する。 「社会における『新聞』の役割とは何か」というテーマで意見文を書く。

本単元の目標は、「信頼できる情報源の重要性について認識できる」に関して、1.情報の信頼性の確かめ方を理解し使うことができる、2.文章の種類を選択し、多様な読み手を説得できるように、論理の展開等を考えて文章の構成を工夫することができるとする。

授業展開においては、生徒に授業に関する情報を提供したり共有したりするためにクラウドサービス（Googleサイト）を利用し、自由進度学習を支援する。当該サービスはGoogle社が提供するウェブサイト作成ツールであり、デジタルコンテンツ等を自由に配置することで学習を支援する。

本実践において、生徒は主に1, 2, 5時に当該ウェブサイトを開覧し、新聞作成の基礎や関連情報について学ぶ。ウェブサイトや他のクラウドサービス、図書館から借用した書籍の情報をまとめ、環境に関する「新聞」を作成する。

以下、各時間について詳述する。

第1時では、本単元の「新聞」に関連する内容が記載されている教科書教材「いつものように新聞が届いた～メディアと東日本大震災」を読む。その中で、災害時における新聞の役割を確認したり、新聞の生命線が信頼性であったりすることを学ぶ。さらに、教科書の内容をまとめた動画を視聴することで「新聞」に求められる役割について理解を深める。また、NHK for Schoolを用いて新聞作成者の思いや新聞を始めとしたメディアの特性、情報を自分で調べて判断することの重要性について知る。

第2時では、新聞作成のためのテーマを設定する。テーマは本単元の目的と国語科のねらいから「環境」「SDGs」「地域社会」に関連するものとした。またNHK for Schoolを用いて、新聞づくりの工夫や情報の受け手としての情報読解力や送り手として正確な情報を届けることの重要性について理解する。さらに実際の新聞の一面を読み、どのように紙面が構成されているのかを把握する。

第3時ではクラスメイトに相談し、写真や文字のレイアウト、内容のわかりやすさについてアドバイスをもらいながら新聞を完成させる。そして、完成したデジタル新聞は、教師のフィードバックをもらうために提出する。

第4時では、前時のフィードバックをもとに具体的に各自の新聞の改善を図る。改善する際に、写真や文字のレイアウト、出典等が明記してあるかを確認する。

第5時では、提出された新聞を相互評価し、投票にてクラス内のベストを決定する。さらに、本単元を通して学んだことについて、「社会における『新聞』の役割とは何か」というテーマで意見文にまとめる。

3.3. 調査の方法

実践の成果と課題を明らかにするために、以下の3つの方法を用いて評価を実施する。

①生徒が制作した新聞に関する評価

新聞について、学習指導要領を参考に設定した評価基準によって判断する。基準は以下の通りである。

- A: 情報の信頼性の確かめ方を理解し、3つ以上の情報を比較しており、かつ、事実を踏まえた自分の意見を具体的に述べ、読み手に説得力のある構成や内容になっている。
- B: 情報の信頼性の確かめ方を理解し、2つ以上の情報を比較しており、かつ、事実を踏まえた自分の意見を述べ、読み手を説得しようと構成等を工夫している。
- C: 情報の信頼性の確かめ方の理解が不足し、情報を複数比較することができない。事実のみを述べている。

②意見文に関する評価

意見文について、①と同様に学習指導要領を参考に設定した評価基準によって判断する。基準は以下の通りである。

- A: 新聞の役割について自分の考えをもとに論理的で説得力のある文章を書いている。
- B: 新聞の役割について自分の考えをもとに論理的な文章を書いている。
- C: 新聞の役割について自分なりに考えをまとめ、意見を書いている。

③主観評価による質問紙調査

単元目標に関する設問（6項目）及び採用した自由進度学習に関する設問（3項目）の全9項目を筆者らで設定し、実践直後に調査を実施する。各項目について、肯定的回答から順に4～1点を付し単純集計する。

4. 結果と考察

(1) 生徒が作成した新聞に関する評価

A基準となった生徒は34名（65.4%）、B基準は12名（23.1%）、A+Bの生徒は56名（88.5%）であり、9割近い生徒が一定程度の水準を満たしていた。このことから、1.「情報の信頼性の確かめ方を理解し使うことができる」2.「文章の種類を選択し、多様な読み手を説得できるように、論理の展開等を考えて文章の構成を工夫することができる」と定めた単元目標は達成できたと判断できる。一方、C基準であった生徒は6名（11.5%）であった。C基準との判定の理由は「複数の情報を比較していない」「自分の意見を記載していない」等であった。したがって、他の生徒に読み直してもらいアドバイスを求めることや新聞作成の際のポイントの提示の必要性が考えられる。

(2) 生徒が作成した意見文に関する評価

A基準となった生徒は26名（50.0%）、B基準は17

名（32.7%）、A+Bの生徒が43名（82.7%）であり、8割以上の生徒が一定程度の水準を満たしていた。このことから、本実践を通じて生徒は社会生活における「新聞」の役割を理解できたと判断できる。一方、C基準であった生徒は9名（17.3%）であった。C基準との判定の理由は「論理的な文章になっていないこと」「課題に正対した内容になっていないこと」等であった。したがって、彼らに対しては文の推敲の具体的な方法を示したり、グッドモデルの提示や友達の良い文章の書き方を参考にしたりするよう助言する等の手立てを取り入れる必要性が考えられる。

(3) 生徒の主観評価による質問紙調査

単元目標に関する設問（6項目）の調査結果を表2に示す。

表2 学習内容に関する質問紙調査の結果

項目	平均点	肯定的回答数	否定的回答数
1. SDGs をもとに身近な社会生活に関連するテーマを設定することができましたか	3.6	51	1
2. 目的(ねらい)を意識して新聞を作ることができましたか	3.5	51	1
3. 情報の信頼性を高めるために複数の情報にあたり、情報を比較することができましたか	3.3	46	6
4. いろいろな読み手を想定し、多くの人を説得できるように論の展開や構成を工夫することができましたか	3.1	46	6
5. 表現の仕方を変えたり、資料を適切に引用したりするなど自分の考えが相手にわかりやすく伝わるように工夫することができましたか	3.3	47	5
6. 新聞を作る上で大切なポイントを理解することができましたか	3.6	50	2

全項目において肯定的回答の平均が中央値を上回っていた。また肯定的回答数と否定的回答数を用いて直接確率計算した結果、全ての項目のにおいて5%水準で有意差が認められた。設問1, 2は本単元のねらいの理解に関する内容である。Googleサイトを提示し、作成する新聞のテーマや単元計画表を常に確認できたことがこの結果につながっていると考えられる。さらに、必要な情報がGoogleサイトに掲載されていたことから生徒たちは頻りにGoogleサイトへアクセスし、情報収集や課題把握をすることができた。設問3～6は、第1時、第2時において教科書の音読や解説動画の視聴、実際の新聞紙面の分析、NHK for Schoolの動画視聴といった学習活動を通じて、教科書教材や動画等から「新聞」というメディアを多面的、多角

的に学べたことが大きな要因であると考え。さらに、Googleサイトに掲載したNHK for Schoolの動画や教師の指導、実際の紙面の確認する活動を通して、新聞の役割である、情報の信頼性や読者に寄り添った紙面を作成することの重要性等を確認しながら繰り返し学ぶことができた結果であると考え。

次に、採用した自由進度学習に関する設問(3項目)の調査結果を表3に示す。

表 3 学習方法に関する質問紙調査の結果

項目	平均点	肯定的回答数	否定的回答数
1. Google サイトは自分で学ぶことに役に立ちましたか	3.9	52	0
2. 一斉授業よりも自分で学習進度を調整する授業の方が学びやすいと感じますか	3.2	43	9
3. 友達と話し合うことで自分の考えが深まりますか	3.6	49	3

全項目において肯定的回答の平均が中央値を上回っていた。また肯定的回答数と否定的回答数を用いて直接確率計算した結果、全ての項目において5%水準で有意差が認められた。設問1からはGoogleサイトの有用性を生徒たちも実感していることがうかがえる。Googleサイトに関しては、本単元のみならず今年度の学習に全て活用していることも今回の結果に大きく寄与したであろう。設問2, 3では、生徒たちが自由に活動できる時間の確保や成果物の相互閲覧が要因だと考えられる。特に第3時以降のデジタル新聞作成においては生徒が提出した成果物を相互に閲覧できるようにした。その結果、生徒たちは内容をまとめることが得意な生徒や写真やイラスト等レイアウトが得意な生徒のところへ行き、教えを乞う姿が見られ、自身の新聞作成へと生かしていた。

5. おわりに

本研究における条件のもとで得られた実践の成果と課題は次の通りである。成果は3点である。

- 1) 授業のねらいに関連して、生徒が制作及び記述し新聞、意見文はそれぞれA+B評価が88.5%, 82.7%であったこと。
- 2) 学習内容に関する質問紙調査から、生徒は学習内容を理解し、授業に取り組んでいたこと。
- 3) 学習方法に関する質問紙調査から、生徒はクラウドサービス (Googleサイト) を用いた自由進度学習

を好意的に捉えていたこと。

課題は以下の1点である。

- 1) 学習方法について、自由進度学習に学びやすさを感じない生徒が一定数存在していることから、学びを自己調整できることの意義を伝えたり、教師のフォローアップを充実させたりして個別最適な学びの場面の設定方法を考慮する必要性がある。

メディア・リテラシーの領域は広いことから、教科書の題材を用いた単元開発を継続し、生徒のリテラシー育成に寄与することが求められる。

参考文献

- 坂本旬, 芳賀高洋, 豊福晋平, 今度珠美 (2020) デジタル・シティズンシップ:コンピュータ1人1台時代の善き使い手をめざす学び, 大月書店, 東京
- 佐藤洋一, 左近妙子 (2000) 国語科における“メディア・リテラシー教育”一導入としてのテレビコマーシャル・アンケート調査と考察 (中学校における実践), 愛知教育大学教育実践総合センター 紀要 3 89-97
- 佐藤真大, 榊原範久 (2022) Web情報に対する評価を用いてメディア・リテラシーを育成する学習教材の開発と評価—中学校社会科歴史的分野を事例に一, 日本教育工学会論文誌 46(2), 325-337
- 手塚和佳奈, 佐藤和紀, 浅井公太, 堀田龍也 (2022) メディアが伝える情報の信憑性を意識させるための小学校第4学年向けの学習プログラムの開発と実施, 日本教育工学会研究報告集 2022 (4), 106-111
- 中橋雄 (編著) (2021) メディア・リテラシーの教育論 知の継承と探究への誘い, 北大路書房, 京都
- 奈須正弘 (2022) 個別最適な学びの足場を組む, 教育開発研究所, 東京
- 堀田和秀, 津田泰至 (2022) 「禁止・制限」より「安全な使い方」を教える! :GIGAスクール時代の「ネットリテラシー授業プラン」, 学芸みらい社, 東京
- 光野公司郎 (2002) 国語科教育におけるメディア・リテラシー教育—説明的文章指導 (中学校第二学年) における批判的思考力の育成の実践を中心に—, 国語科教育 52, 56-63.
- 文部科学省 (2021) 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して—全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現— (答申), https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf (2022年6月12日参照)